

コンゴ伝道に見る異文化接触 (45)

1998年9月、ブラザビル市の南西部（プール県）に潜んでいたコレラ前首相派の「Ninja」（ニンジャ）と称する私兵が武装蜂起をし、首都に向かって進軍した。AFP通信によれば、ニンジャは小さな集団に分かれてゲリラ戦を展開、熟知する森の中を自由に動き回り、プール県のあちらこちらで正規軍と交戦したようだ。12月には、首都から40キロ離れたンバンザ・ンドゥンガや20キロ地点のリンゾロといった町でも武力衝突が起きた。コンゴブラザビル教会現会長であるバゼビバカ・ピエール氏は、戦闘に巻き込まれた様子を、高橋利行ヨーロッパ・アフリカ課長（当時）に手紙（1999年2月17日付）で報告している。この彼の手記を見ながら、当時の状況を振り返っていきたい。

「昨年12月、コレラとリスバがそれぞれの民兵を動かして政府に対し公然と攻撃を仕掛けました。それは破壊と殺戮の始まりでした。しかし、武力を使っても、彼らが失ったものは取り返すことはできないでしょう。愚行によるコンゴの惨劇が繰り返されています。」

AFP通信によると、武力衝突を避けて、9月からプール県の少なくとも3万人の住民が移動した。移動先はブラザビル市内や第2の都市ポワントノワール。中にはコンゴ河を渡って隣りのコンゴ民主共和国へ逃げた人たちも少なくなかったようだ。ユニセフは、森の中に避難をした人が数千人にもおよび、そこでの生活は悲惨を極めてしていると警告していた。12月半ばになると、発砲や爆撃音は首都でも聞こえるようになった。ニンジャが首都のすぐそばまで侵攻してきたのであろう。バゼビバカ氏の手記の続きを見ていこう。

「プール地方の森林地域でニンジャが武力制圧をしたというニュースは、当初冗談と受けとめていました。ところが、驚いたことに日を追って政府軍がブラザビルの方へと退却を始めたのです。その退却の道々、ミンドゥリ、キンカラ、ガンガリゴロなどでは、多くのものを略奪していきました。もちろん、進軍するニンジャもまた道中で同じように略奪行為をはたらきました。このことにより、国道1号線や鉄道沿い地域の住民は、一斉避難を始めました。12月4日、ニンジャの首都侵入に備えてジュエ橋は封鎖されました。これがパニックの始まりでした。我々は逃げ道を失ったのです。」

このジュエ橋というのは、ジュエ河がコンゴ河に合流する直前かけられた橋で、ポワントノワールに通じる国道1号線の出発地点になっている。ブラザビル市から南西方面に向かうにはこの橋を渡るしか道はなく、それ以外は、水深も深く所によっては流れも速いジュエ河を渡らねばならない。バゼビバカ氏が当時預かっていたポトポトジュエ布教所はサンゴロ地区にあり、教会が建っているマケレケレ地区から見ればジュエ橋の向こう側に位置する。つまり、サンゴロの人たちは橋の閉鎖によって、市内へ避難する道を失ったのである。彼らの背後には首都に向けて進軍を続けるニンジャが迫っていた。

「12月17日、午後4時頃、ニンジャが突如サンゴロ地域に現れました。垢にまみれ、裸足で、剃り上げた頭をし、ある者はナイフを、またある者は武器を持った若者たちで、

一目で森から出てきたと分かりました。彼らは午後6時頃にジュエ橋を突破し、翌朝にはバコンゴやマケレケレ地区まで侵入しました。」

この時点では、食料や金銭などの要求はあつただろうが、住人に直接的な被害をもたらすことはなかったようだ。そもそも、サンゴロやバコンゴ、マケレケレといった首都の南部に居住する多くの人たちは、この反政府ゲリラのニンジャと同じ部族（ラリ族）だった。住人の中には彼らの到来を歓迎した者もいたかもしれない。しかし、それは逆に、一般の人たちを危険に晒すことにもなった。なぜなら、政府軍にすれば、ニンジャも一般市民も同じ「敵部族」となるからだ。しかも、政府軍の中にはアンゴラやチャドからの傭兵も多く、彼らにとってそうした区別はより難しかっただろう。実際、そうした状況下で多くの一般住民が同じ部族というだけで殺害されている。

12月18日、首都の中心部へのニンジャの進軍を阻止すべく、戦闘機や戦闘ヘリなど最新の兵器を出動させ、政府軍は徹底的な攻撃を加えたとAFP通信は伝えている。武装面では政府軍は圧倒的に優位だった。劣勢に回ったニンジャはすぐに退却を余儀なくされたが、それは戦闘に巻き込まれた周辺の住民にとっても同じだった。バゼビバカ氏の手記には、その時の様子が次のように書かれている。

「政府軍は最新兵器で徹底的な攻撃を加えましたが、アンゴラ兵、チャド兵の姿もその中にありました。ニンジャは退却を始めました。ブラザビル南部の全ての若者は政府軍からはニンジャと見なされ、数多くの人が殺されました。市南部では家々が焼かれ、全ての物が略奪されました。大規模な爆撃があつたので、我々はその戦場と化した所から逃げ出さざるを得なくなりました。ポトポトジュエ布教所には、知人、信者家族など大勢が集まってきました。19日にはサンゴロに弾丸が飛来し死者も出始め、危なくなってきました。皆は脱出すべく荷物をまとめ、私一人だけその場に残りました。妻と信者家族は先ずキンプオモに住む私の兄の家に避難しました。他の教会信者はガンガリゴロ方面に向かいました。翌20日は布教所月次祭の日でしたが、私もそこに留まるのが難しくなってきました。多くの弾がすぐ近くで飛び交っていました。私は家族に食べ物を届けに行きました。しかしその夜、布教所に戻ろうとしましたが、もう無理でした。大切な書類、ハッピー、着替えを入れた鞆は持ち出せませんでした。アンゴラ兵の攻撃が始まっていました。」

彼が一人だけ残ったのは、その中でも月次祭だけはつとめようと思ったからだった。布教所からキンプオモへは、民家がほとんどない3～4kmの細い道を辿っていく。とりわけ12月は雨季なので、背丈以上の草木が覆い茂っていたにちがいない。起伏も激しく、夜になると真っ暗である。あちらこちらから聞こえてくる銃声の中を、いつ、誰が、どこから出てくるか分からない小道を進むのは、どれほどの恐怖であつただろう。サンゴロを離れキンプオモに到着した彼らだったが、まもなくそこも危険となり、さらに南西に移動しなければならなかった。（続く）